

血管病 そこが知りたい

へいそくせいどうみやくこうかしょう 閉塞性動脈硬化症

人は血管とともに老いる

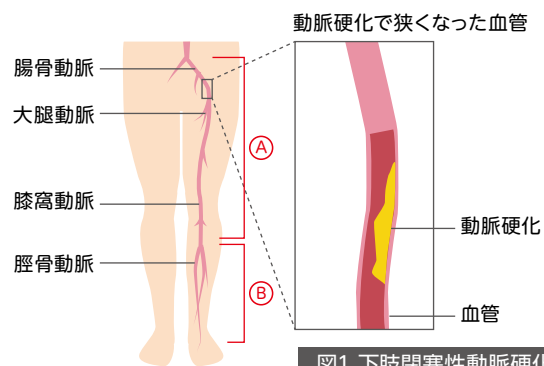
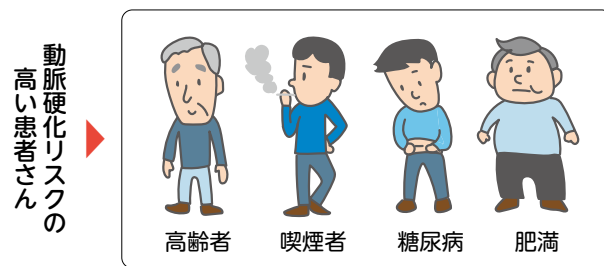
血管年齢という言葉がありますが、人は血管とともに老いるといわれます。21世紀は血管病の時代ともいわれ、高齢化に伴い年齢とともに進む動脈硬化が注目されています。今回は、動脈硬化を原因とする足の病気がテーマです。あなたの足は大丈夫ですか？

重症化する前の治療が大事 日帰りのカテーテル治療も可能

Q そもそも動脈硬化ってなに？

水道用ホースをイメージしてみてください。新品のホースはしなやかで弾力性に富んでいますが、古くなると日光や雨、内側の汚れなどにより硬くひび割れて劣化してきます。全身の臓器に酸素や栄養分を送る動脈も同様に、加齢に加え、悪い生活習慣の積み重ね、高血圧・高脂血症・糖尿病・腎臓病などの関連疾患の影響が重なり、動脈は硬く、もろくなっていきます。

動脈硬化はすべての臓器に関係します。血流障害



●「下肢の動脈硬化」は水道管に例えるとわかりやすい

動脈硬化による病気の一つに、下肢に起こる「閉塞性動脈硬化症」があります。これは文字通り、動脈が硬くなることにより足の血流が不足する病気です。足の大動脈は腹部（おへソの当たり）で左右に分かれ、膝までは主に一本の管になっています＝左下の図1Aの部分。

これらの動脈が狭くなると、水道管の元栓を締めたとような状態となり血流が低下し、冷感・しびれ・色調不良、間欠性跛行、安静時痛、皮膚潰瘍・足指壊疽などの虚血症状が現れます。膝下では脛骨動脈などの3本の動脈に分かれます。膝下では脛骨動脈などの3本の動脈に分かれます＝図1Bの部分。

Q 「閉塞性動脈硬化症」の調べ方は？

「閉塞性動脈硬化症」を疑う症状があれば、下肢動脈検査を行います。診察と足関節上腕血圧比（ABI検査）・ドップラー血流計による血流音評価・超音波（エ

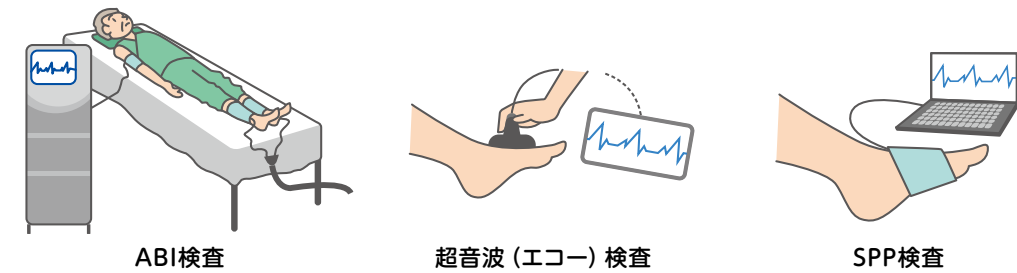


図2 下肢血流の検査方法

コー）検査・皮膚灌流圧（SPP検査）などの検査との組み合わせで「血流がどのくらい低下しているのか」「どの部分が問題なのか」を正確に診断することができます＝図2。

Q 「閉塞性動脈硬化症」の治療法は？

- 車のメンテナンスや修理に置き換えると理解しやすい

車などの大切な機械は、定期検査を行い、メンテナンスしながら使って、調子が悪くなれば修理します。「閉塞性動脈硬化症」も同様に考えると理解しやすいです。

血圧やコレステロールの管理などは動脈硬化を進行させないためのメンテナンスです。下肢に心配な症状があれば検査を行い、まず運動療法や薬物療法を行います。病変が高度になったり症状が進んだ場合は、カテーテル治療などによる修理が必要になります。

●カテーテルによる最新の治療

近年、カテーテル治療の技術が発達し、器具も進化して、多くの病変がカテーテルによって治療できるようになっています。バルーン（風船）やステント（メッシュ状の金属の細い筒）により、血管を拡張する治療法です。

昨年より最新の治療として閉塞性動脈硬化症に対する「薬剤塗布型バルーン」や「薬剤溶出性ステント」



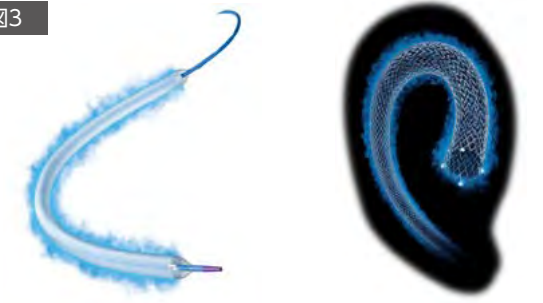
当院におけるカテーテル治療の様子

福井 大祐
（ふくい・だいすけ）

「さくら血管病クリニック」院長。信州大学医学部卒。信州大学医学部心臓血管外科准教授を経て2018年に現在のクリニックを開院し、300例以上のカテーテル治療を手がけてきた。血管外科学会認定血管内治療医、脈管専門医・指導医、心臓血管外科専門医・修練指導者、外科専門医・指導医、救急専門医、腹部・胸部ステントグラフト施行医・指導医。（松本インターより車で3分 ☎0263-47-1500）

が使用可能となり、治療の成績も以前より良くなっています＝図3「青い部分＝薬剤」のイメージ図

図3

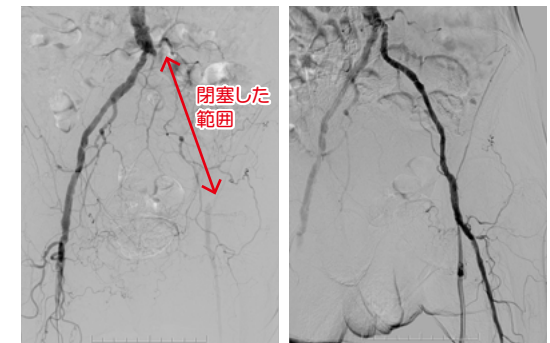


薬剤塗布型バルーン：表面に薬剤が塗布されていて病変に直接作用する

薬剤溶出性ステント：筒状の形状記憶合金にて拡張状態を維持する

Q 日帰り治療とは？

全身麻酔を必要としない治療は、日帰りまたは一泊二日での治療が可能で、カテーテル治療もその一つです。生活習慣の改善指導や高血圧・高脂血症・糖尿病・腎臓病などの動脈硬化に関係する病気の治療を行いながら全身の動脈病変の診断を行い、適した時期の治療のタイミングを逃さないことが大切です。特に病変が閉塞する前に治療ができれば、治療範囲も最小限にすることができます。「閉塞性動脈硬化症」を疑う症状があれば、早めの受診が大事なのです。



治療前の動脈造影像：左腸骨動脈が閉塞

治療後の動脈造影像：ステント留置し血流が再開